

# 宰府画報

第 19 号

2023 年 7 月  
(令和 5 年)

発行  
太宰府市教育委員会  
文化財課



バックナンバーはこちらから

## 調査見聞

### 吉嗣家資料人名帳

梅仙祝賀の合作に見える日中の人々

吉嗣家の書画に遺る人名

吉嗣家資料「書画編」報告書の作成にあたり、吉嗣家に遺る書画を調べていくと、梅仙、拜山、鼓山と関わる、江戸時代後期〜昭和期にかけての画家、文人、政治家など約560名もの人物の名があることが分かりました。これらの人々は活動場所も様々で、九州はもちろん、全国各地、あるいは中国で活動していた人も見えます。今回はその中から、梅仙の長寿に関する作品に見える人々を紹介いたします。

《松岩図》(図1)は、吉嗣梅仙が描いた



図1 絹本着色 掛幅装  
140.3×51.9cm  
吉嗣家資料

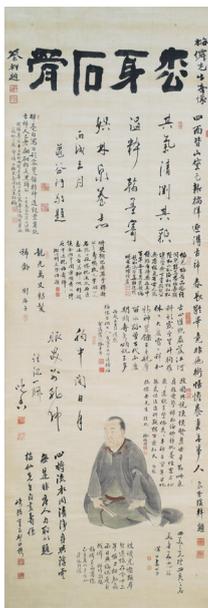
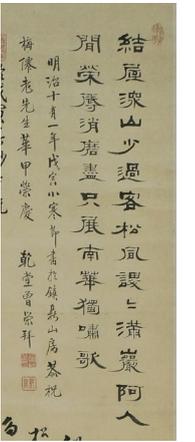


図2 絹本着色 掛幅装  
149.8×51.3cm  
吉嗣家資料

画に、長崎で活動した小曾根乾堂(篆刻家)、伊藤深江(画家)、劉芝香(唐通事※註)、清人の若蓮許鴻、何培光、吳道益彰(経歴不詳)、馮鏡如(画家)らが賛を書く、計8人の合作です。岩に生えた松と灵芝という縁起の良い画題が南画風の軽妙な筆致で描かれ、賛の内容はいずれも梅仙の長寿を寿ぐものとなっております。それぞれの落款を見てみると、同時期でなく時を隔てて画や賛文が付されているようで、梅仙の画は明治10年(1877)の61歳の時に描かれ、賛文は明治11年から12年にかけて順次書かれていったことが分かります。

さて、本合作中には名が見えませんが、作品の成立には、梅仙の息子である吉嗣拜山が深く関わっていることが想定されます。拜山は、明治11年の3月から6月にかけて中国・清へ渡航しているのですが、ここに名が見える人物たちは、渡航先の清やその前後に滞在した長崎で拜山が交わった人々が中心となっているからです。例えば、小曾根乾堂や劉芝香は、拜山の渡航に際



小曾根乾堂の賛 (図1 右上部分)

し詩を贈っています。また、清人では、若蓮許鴻は拜山と清の揚州で親しく交流し、馮鏡如は拜山の帰国の際に同じ船で日本に渡った人物です。還暦を迎えて程ない父・梅仙の長寿を祝すため、画を携え旅で交わった人々に賛を請う拜山の姿が目に見えかびます。

### 拜山の人脈が結集した《吉嗣梅仙寿像》

実は、同様の趣向の合作はほかにもあります。《吉嗣梅仙寿像》(図2)は、明治19年に古稀を迎えた梅仙を祝すために制作されたもので、梅仙の自画像を囲んで13人による題字・賛が書かれます。先述の伊東深江、劉芝香、馮鏡如をはじめ、龜谷省軒(漢学者)、相良李蹊(医者)、洪江晚香(菊地神社宮司)、岡田篤所(医者)のほか、清人の王治本(詩人)、蔡軒(駐長崎領事)、孫士希(南京語教師)、徐佐時、劉慶汾、雪鴻(上記3人は経歴不詳)など日中交えた人選となっており、こちらも制作には拜山の人脈が多く反映されていることが指摘されています。ちなみに拜山は、梅仙の古稀にあたり盛大な祝賀の催しも行っており、そこにも沢山の人が関わっています。

### 《松岩図》や《吉嗣梅仙寿像》は、梅仙の慶事を機に、梅仙・拜山父子の幅広い交友関係が映し出された作品といえることができます。また、清国渡航以後も、拜山が清人との関係を大事に継続してきたことも窺えます。(日野綾子)

※唐通事：江戸時代、中国との貿易交渉で通訳・翻訳などにあたった人々。

## メイシヨ メイブツ

日田の学びや 咸宜園  
〜拜山と清浦奎吾〜

元治元年(1864)、志を立て故郷太宰府を離れた吉嗣拜山は、19歳で日田(現大分県日田市)の咸宜園に入門します。

咸宜園は広瀬淡窓が創設し、以後90年にわたり全国から延べ5千人もの塾生が学んだ江戸時代最大規模の私塾でした。淡窓は、敷地内の居宅「秋風庵」で晩年を過ごしましたが、その玄関に掲げられた扁額は、咸宜園出身で後に第23代内閣総理大臣となった清浦奎吾が昭和10年(1935)に揮毫したものです。

清浦奎吾(1850〜1942)は熊本県山鹿市の出身で、拜山入門の翌年に咸宜園の門を叩きました。2人は好一对の苦学生で、許斐友次郎氏の「拜山画伯の半生」によると、拜山は毎晩按摩のアルバイト、奎吾は早朝から托鉢に出かけ、学資を得たといえます。ある時、空腹に耐えかねた拜山が、奎吾の机の下から僅かな粟米を見つけて食べてしまい、大騒ぎに。炊いた米に塩と行灯の油を垂らして食べた

拜山は、晩の按摩代で弁償する約束をし、仲直りをしたというエピソードが伝わります。2人の交流は続き、拜山の漢詩集『古香書屋詩存』には、奎吾が共に学んだ往時を懐古する序文を寄せています。(井上理香)



秋風庵  
(上)扁額「秋風庵」  
(中)清浦奎吾肖像  
(下)史跡咸宜園跡の一角に建つ秋風庵の全景

# 逸品探訪

太宰府の絵師に関連する逸品・名品を紹介し

吉嗣梅仙作

## 【天岩戸図】

超有名な日本の神話

太陽をつかさどる天照大神が天岩戸を開き、光を取り戻すため、神々が策を講じて天岩戸をこじ開けるといふ、誰もがよく知る神話を主題としています。矛を持ち、伏せた桶を踏みならして舞う天鈿女命と、朝を知らせる鶏の音が気になって、天照大神が扉を少し開けた、まさにその瞬間を描いています。

画面中に墨書はありませんが、画面右下に捺される印章から、吉嗣梅仙の作であることがわかります。

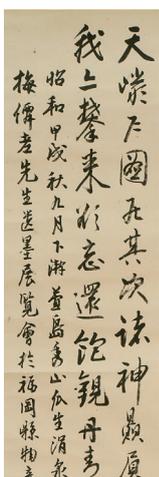
### 格調高い表現

構図と表現の特徴を見てみると、まず構図はほぼ真正面からの視点とし、岩に囲まれた広場に集う神々を整然と配置しています。天鈿女命が見上げる先に描かれる神鏡や、手力雄神が手をかけるのと反対方向に光が出現するなどの表現は、物語の重要な要素を際立たせています。彩色には、緑と茶色を基調とした暗い色調の中で神鏡と天鈿女命の白さ



絹本着色 掛幅装  
125.9 × 42.0cm 明治期  
吉嗣家資料

藤瀬冠村《書》部分  
吉嗣家資料



天岩戸図 其 次 法 神 巖 戸  
我 上 接 来 未 志 還 飽 親 丹 赤  
昭和甲戌秋九月下瀬首島山山生消象  
梅俣老先生送墨屋覧會於福岡縣物主

を際立たせ、明るく輝くように表現されます。人物の動きは控えめですが、それが画面全体に格調ある趣を与えているように思われます。

### 円熟期の優作

吉嗣家資料には、大正6年(1917)12月22日付けの「受取証」というものがあり、本作と日本武尊図の2点が、太宰府の宮本善三郎なる人物から1000円で譲渡されたものであることが分かります。また、左の写真は、昭和9年(1934)に鼓山と門人たちが梅仙没後40年の遺墨展覧会を催した際に、同展を訪れた拜山の門人・藤瀬冠村がその感慨を記した書ですが、文中には、百幅もの佳作が陳列される中で、諸神が力を合わせて天地を開く天岩戸図が見事であったと記しています。即断はできないものの、本作が当該作品であろうと推察されます。制作年不詳ながら、梅仙円熟期の作とみなせる優品です。(井形栄子)



部分

いちまい 賞 鑑 稿 画

## 【徳川家康像】

齋藤家資料

現在放送中の大河ドラマ「どうする家康」の主人公徳川家康は、慶長8年(1603)に江戸幕府を創設し、慶応3年(1867)の大政奉還まで約250年にわたる太平の世を築きました。家康は元和2年(1616)に亡くなりますが、没後、朝廷より「東照大権現」の神号を賜り、神として崇められます。日光山輪王寺、久能山東照宮をはじめ各地で神格化された家康が、束帯姿で纏帯の豊の上に座すという定型化した形で描かれました。

本資料はそのような家康像の模写だと考えられるものです。豊の縁には「白」・「黒」・「紫雲ケン」・「アイ雲母/ケン」・「緑青」など細やかに色の注意書きあり、装束には「袍黒」「クロ

ひとこと ぐずし字

### 【徳有隣】

印章には作者名や雅号を記す落款印だけでなく、好みの詩句や語句を刻んだ引首印や遊印もあります。今回は吉嗣家資料から遊印と思われる印章の篆書を紹介しま



この印章は弘化3年(1846)に篆刻家の嵩春齋が作成したものです。春齋は幕末に尊王攘夷派の清河八郎を匿った罪で投獄され獄中死した人物です。(木村純也)

画像の文字は一見すると5文字に見えますが、「徳有隣」という3文字になります。右上は「徳」、右下は「有」、左側は漢字三文字のようですが、「隣」という文字になります。上の「炎」に見える字が「米」、「門」は「舛」、下が「卩」になります。印章

「白」など色の特徴が注記されています。裏面には「内府公生像/天保十三壬寅秋八月寫/葵所蔵」とあり、天保13年(1842)に写されたと思われる。模写した作品の原本がどんなものだったかは不明ですが、この画稿をもとに秋圃も家康像の作品を制作したのか、想像が膨らみます。(木村純也)



紙本墨画淡彩 52.8 × 39.6cm



印章外観  
3.2 × 3.2 × 4.3cm  
石製  
吉嗣家資料

「メイショメイブツ」のコーナーは、今号より太宰府市内を飛び出し県外も含めた幅広い内容でお伝えしていきます。